

今週の為替相場見通し(2016年8月29日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		99.93 ~ 101.94	101.82	98.50 ~ 103.50
ユーロ	(ドル)		1.1180 ~ 1.1355	1.1200	1.1000 ~ 1.3500
(1ユーロ=)	(円)		112.80 ~ 114.27	113.98	111.50 ~ 114.50
英ポンド	(ドル)		1.3034 ~ 1.3280	1.3131	1.2950 ~ 1.3250
(1英ポンド=)	(円)	*	131.07 ~ 133.88	133.75	131.00 ~ 134.50
豪ドル	(ドル)		0.7551 ~ 0.7692	0.7555	0.7350 ~ 0.7650
(1豪ドル=)	(円)	*	76.11 ~ 77.20	77.02	75.00 ~ 78.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 98.50 ~ 103.50 円

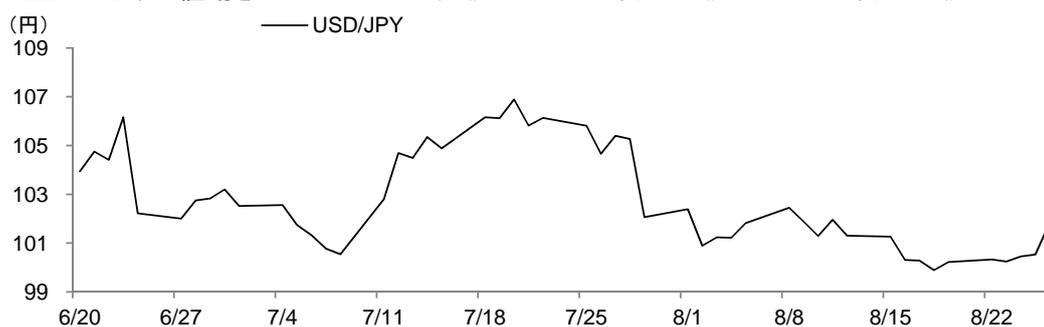
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週末にイベントを控えて100円台での狭いレンジ取引が継続した後、イエレンFRB議長講演で利上げに関して前向きな見通しを示されると、ドル/円は102円近辺まで上昇する展開となった。週初22日は、FRB高官の利上げに対する前向きな発言を好感して100.90円付近まで上昇してギャップオープン。その後は利益確定のドル売りなども相俟って100円台前半まで反落した。翌23日もドル売りの流れが継続し、一時99.93円まで下値を切り下げる場面も見られたが、下値を追う動きは見られず、再び100円台前半を回復した。24日以降のドル/円は週末にイエレン議長の講演を控えて100円台で様子見ムードが継続。週末のイエレン議長講演では、「政策金利引き上げの論拠が強まっている」と発言したことでドル/円は100.90円付近まで急伸するも、利上げ時期に関する言及がなかったことがドル売りを誘い一時100円付近まで反落。しかし、他のFRB高官による利上げへの前向きな発言がドル買いをサポートし、週高値となる101.94円まで上値を切り上げた。その後、若干売り戻されるも、ドル買いの流れは継続し、101.80円近辺で越週した。

今週のドル/円は、ドル買いの流れが継続することで上昇すると予想。但し、週末の米8月雇用統計の結果次第では利上げ期待が一気に剥落する可能性に注意したい。先週末のイエレン議長講演は早期利上げへの期待を市場に残すとともに、他のFRB高官と同じ向きの発言をしたことで「利上げ」に対する前向き度合を補足した形だ。これを好感しドル/円相場ではドル買いが進行した。時期については言及がなく不明ではあるが、早期の利上げに対して懐疑的だった市場の期待が高まっており今週はドル買いが継続するだろう。斯かる状況下、9月2日(金)に予定されている米8月雇用統計は、FRB高官が発言する通り米経済が改善に向かいつつあるかどうかを図る試金石となるだろう。仮に良好な結果となれば、今まで利上げの可能性を示唆するFRB高官発言を額面通りに受け取らなくなっていた市場の態度が変わり、米利上げ織り込みが進む可能性が高い。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/22~8/26)の値動き: 安値 99.93 円 高値 101.94 円 終値 101.82 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1000 ~ 1.3500 111.50 ~ 114.50 円

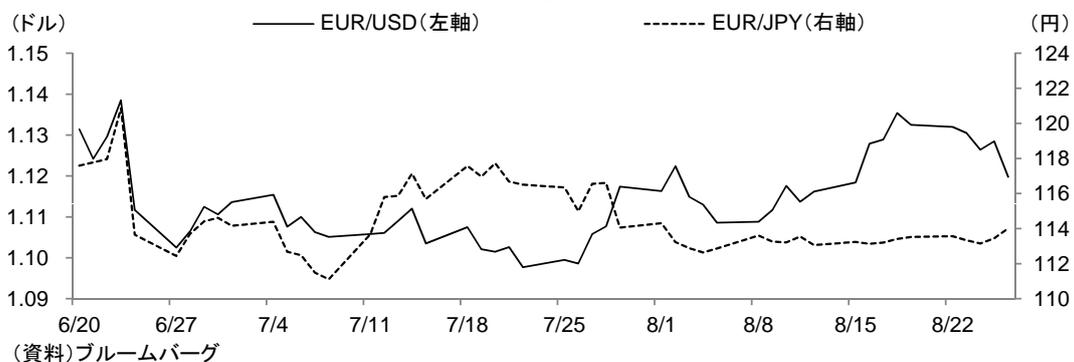
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は週末に対ドルで急落する展開。週初22日ユーロは対ドル1.13台前半、対円113円台後半でオープン。前週末に完全雇用と2%の物価上昇率の目標達成に近づいたとするフィッシャーFRB副議長発言を受けて米金利が上昇する中、ユーロは対ドル1.12台後半まで下落した。その後はユーロの買い戻しが優勢となり、対ドル1.13台前半まで回復したものの、対ポンドで軟調に推移したことが影響し、徐々に上値が重くなる展開となった。また対円ではオープン直後のドル/円急騰時に114.27円をつけた。翌23日はユーロ圏8月PMIの良好な結果を好感すると、ユーロは一時対ドル週高値となる1.1355まで上昇した。しかしその後、急騰する原油価格や堅調な米7月新築住宅販売数などを背景に米金利が上昇すると、ドルが買い戻されユーロは1.13台前半まで軟化した。さらに週央24日にかけてもユーロの下落は止まらず、加えてイタリア中部で発生した地震の影響からユーロ売りが強まると、対ドル1.12台前半、対円週安値112.80円まで値を下げた。翌25日は、独8月IFO企業景況感が市場予想を下回り2か月連続で低下したものの反応は限定的であった。その後、ユーロ/ポンドの上昇を受けてユーロは対ドル1.12台後半で底堅い動きが継続したが1.13には届かず、方向感に欠ける展開となった。週末はイエレンFRB議長による講演やフィッシャー副議長からのタカ派発言を背景にドルが全面高となると、ユーロは対ドル週安値の1.1180まで急落した。その後もドルが強含み、対ドル1.12レベル、対円113円台後半で越週している。

今週のユーロは、週末にイベントを控え週半ばまでは動意に乏しい展開を予想するが基本的には上値重く推移するであろう。先週末にFRBによる年内利上げ期待が高まり、足許ドルが全通貨に対して大きく買い戻されている。今週も同様の流れが継続することが予想され、ユーロの上値は重くなりそうだ。先週末に米ワイオミング州ジャクソンホールの経済シンポジウムで行われたイエレン議長講演からは年内利上げの具体的な手掛かりは得られなかった。だがその後、フィッシャー副議長によるコメントをもってイエレン議長講演における年内の早期利上げを読み解いた格好になっており、市場では9月および12月の利上げの織り込みが進んだ。今後の米金融政策を占う上で今週2日(金)の米8月雇用統計は注目であろう。良好な内容が確認された際には利上げ観測の一層の高まりからドル買い優勢となりユーロは下値を探る展開となるであろう。しかし反対に予想外に冴えない内容となれば、足許織り込まれた利上げ期待が調整されユーロがサポートされるシナリオには留意したい。一方、経済指標としては、31日(水)にユーロ圏7月失業率、ユーロ圏8月消費者物価指数(HICP)が予定されている。ECBは前回7月会合で向こう数か月間のインフレ圧力は非常に低いと見通しており、次回会合(9月8日)での追加緩和期待は足許剥落しているものの、ユーロ圏経済のファンダメンタルズを確認する上で両経済指標には留意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/22~8/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.1180 高値 1.1355 終値 1.1200
(対円) 安値 112.80 高値 114.27 終値 113.98



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3250 131.00 ~ 134.50 円

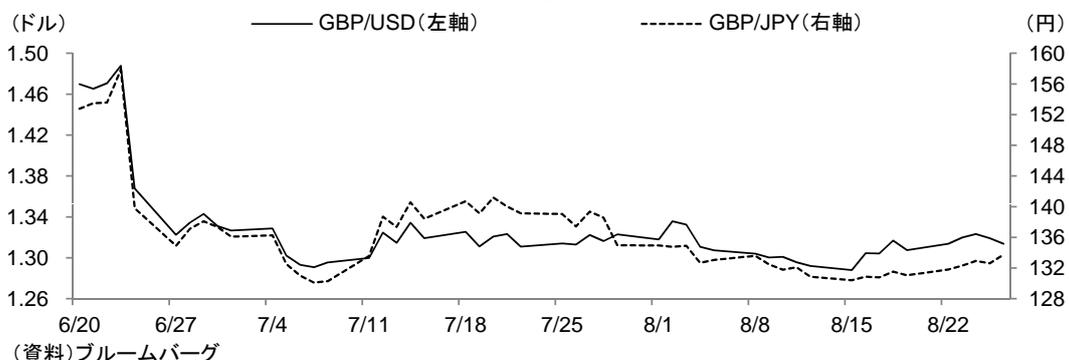
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、特段の材料もない中、堅調な滑り出し。週央以降はそのまま横ばいへと移行した。ポンド堅調の先行は、対ドル、対円、対ユーロなど主要通貨に対し共通しており、なにかしらポンド側に買い材料がある可能性が考えられたが、それらしい英経済指標、英要人発言などは見当らなかった。メイ首相は12日から2週間休暇に入っており、この間、他主要閣僚や英中銀高官なども大半は夏休み中だったのではないかと。英のEU離脱や英中銀金融政策に関する議論はほとんど聞かれず、英国内でも英政治関連では野党労働党党首選絡みの動向ぐらいしか報じられなかった。22日には米連銀フィッシャー副議長の「米経済は(米連銀の)誘導目標に近付いている」との発言(21日)が伝えられたが、通貨市場の関心は26日の同連銀イエレン議長講演に集まっており、様子見気分の強い中、同副議長発言はほとんど注目されなかった。果たして、イエレン議長の講演内容は「米経済は米連銀の雇用・物価誘導目標に近付いている」「利上げに向けた環境はここ数か月で更に整ってきた」など、フィッシャー副議長発言を裏打ちする内容と言えた。ドルは一旦全面高に振れた後、同講演の「利上げは穏やかなものになる」との部分で殊更注目を集め、程なく急反落。更に週引けに掛けては全面高と、週引けに掛けドルは乱高下した。結局、週前半のポンド堅調は、特段材料があつての値動きではなく、6月23日の英国国民投票がEU離脱を選択して以来、大きく水準を切り下げて推移してきたポンドをこれ以上売り続けるための新規材料が見当らなかったことが、単純に調整的なポンド買い戻しを促した結果だったと考えられた。

今週の英ポンド相場は、軟調気味の横ばいを予想。上述イエレン議長発言を受け、金融市場の次の関心は2日(金)の米8月雇用統計に移っていくものと思われる。ポンドの動向にも、同統計が大きな影響を及ぼすはずだが、逆に、その数字を見るまでは様子見気分の強い膠着が支配的にならざるを得ないだろう。その膠着を破る可能性のある要因として考えられるのは、英のEU離脱交渉に関するなんらかの進展。主要閣僚などの夏休みで動きの止まっていた離脱交渉だが、今週からはメイ首相も執務に復帰するはずで、英中銀筋から金融政策の先行きに関する議論が聞かれる可能性なども考えられる。ただ、EUとの自由貿易とEUからの移民流入制限という、EUの理念上成立し得ない「二兎」を追う英政府の交渉が、すんなりと進捗を見せる可能性は低く、なんらかの困難が顕在化される可能性の方がより警戒される。ポンド軟調を中心に見込むのはそうした困難を警戒するから。英経済指標は、30日(火)に英中銀の7月住宅ローン承認件数、31日(水)にネーションワイドの8月住宅価格など住宅関連指標、1日(木)に英8月製造業PMI、2日(金)に英8月建設業PMIなどの景況感指数の発表が予定される。引き続き、弱目の数字には「EU離脱の悪影響」という読みでポンド売り圧力が強まる一方、強目の数字は「まだ影響が表れていないだけ」と看過される、非対称な反応が予想されるが、いずれにせよ、今週の一連の指標は「小粒」で、余程一方向に傾いた数字でも並ばない限り、ポンドが本格的に材料視する可能性は高くないものと見込む。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/22~8/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.3034 高値 1.3280 終値 1.3131
(対円) 安値 131.07 高値 133.88 終値 133.75



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7350 ~ 0.7650 75.00 ~ 78.50 円

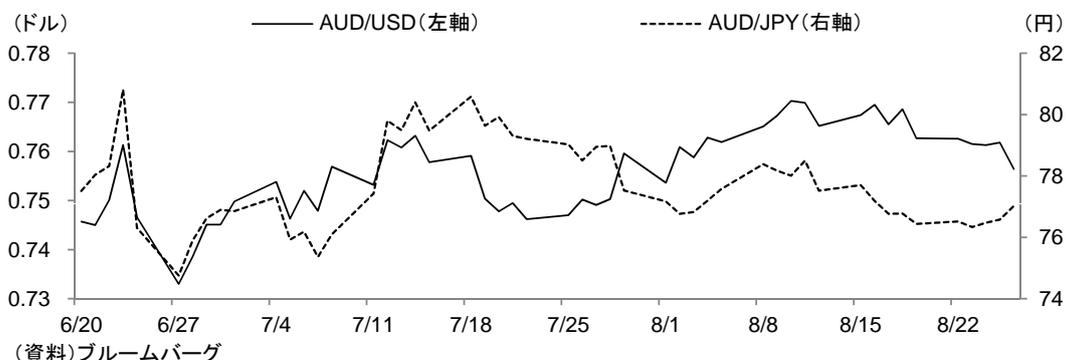
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、ジャクソンホールでのイエレンFRB議長講演を受けてドル買いが強まり、引け前に下落する展開。週初22日、豪ドルは対ドルで0.76ちょうど近辺でオープンし、その後は目立った材料がない中で2週間ぶり安値となる0.7584まで下落。23日は26日のジャクソンホールでのイエレン議長の講演を前に膠着感が強く、商品価格の上昇を受け0.7655まで強含むが、その後は反落。24～25日は前述のイエレン議長講演を控えて様子見ムードが続き、豪ドルは0.76を挟んでの小幅レンジ推移が続く。26日は注目のジャクソンホール講演でイエレン議長が追加利上げに意欲を示したことや、その後もフィッシャーFRB副議長がタカ派な発言を行ったことからドル全面高の展開となる。豪ドルは一時週高値0.7692をつけた後、ドル高が強まる過程で週安値0.7551をつけ、安値圏となる0.75台半ばで越週となった。一方、対円では週初22日に76円台半ばでオープン。22日～25日はジャクソンホールでのイエレン議長講演を前に様子見ムードが続き、豪ドル/ドルとドル/円が小幅レンジ推移となる中で、豪ドル/円も小動きとなる。24日は週安値76.11円をつけるが方向感はず、26日のジャクソンホール講演を迎える。ジャクソンホールのイエレン議長講演後にドル全面高となると、豪ドル/円は上昇。ドル/円の上昇が大きかったこともあり、週高値77.20円をつけ、結局77円ちょうど近辺で越週となった。

今週の豪ドル相場は軟調推移を予想する。先週はジャクソンホール講演でイエレン議長が、「利上げへの論拠が強まってきた」と発言したこともあり、米国の追加利上げ期待からドル全面高の様相を呈した。こことも米国の年内利上げ観測が盛り上げりに欠けていた中で、豪州準備銀行(RBA)は8月2日にRBAキャッシュレートを1.50%に引き下げたが、先週のイエレン議長の発言を素直に受け入れるとすれば、米豪の金融政策は今後異なる方向に進んでいくことが見込まれる。これまで豪ドルは資源価格の上昇を背景にした、相対的に高い政策金利が海外投資家の投資リターンの魅力となり、継続的な直接投資フローが進んできたが、今後2国間の金利差が縮小する過程においては、中長期的には豪ドルから米ドルへの資金シフトも懸念される。中国経済の成長が鈍化する中で資源価格上昇を背景とした豪ドル高は見込みづらく、相対的な金利リターンも米国に比べて薄れてくる状況下、豪ドル相場は当面軟調推移が継続しそうである。また、今週の主な経済指標は30日(火)に7月住宅建設許可件数、31日(水)に民間部門信用、9月1日(木)に4～6月期民間設備投資、7月小売売上高が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/22～8/26)の値動き: (対ドル) 安値 0.7551 高値 0.7692 終値 0.7555
(対円) 安値 76.11 高値 77.20 終値 77.02



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。